
無死殺し

タナトス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無死殺し

【Nコード】

N9084Y

【作者名】

タナトス

【あらすじ】

人の手では決して殺すことの出来ない

神の作りだした悪魔「無死^{ムシ}」

それをこの世から消し去る「無死殺し」達の物語

ジン（前書き）

はじめて小説を書きました

ちよつと厨二くさい作品かも・・・

文の書き方などが下手です

アドバイスや感想をくれるとうれしいです!!!

ジン

この世に神が作り出したヒトガタの異端

決して死なない・・・

決して殺すことのできない・・・

「無死^{ムシ}」

あらゆる兵器・武術など無死の前では無力

その無死を消し去ることが出来るものはこの世にただ一つ

「イモータルキラー」

通称・無死殺し・・・

とある暗い部屋の中・・・

「痛むかい？」

メガネをかけた20代くらいの男は注射器を手に言う・・・

「少し・・・」

おそらく10歳にも満たないであろう少年が答える

「そうか、しかし君はこれから人類の希望になるんだよ。もう少しの辛抱だから」

「じゃあ、痛いのが我慢する！」

少年は万弁の笑みで言った・・・

そして、先ほどの麻酔が聞いた少年は深い眠りに就く・・・
それを見ているメガネの男は静かに微笑む
静かに・・・

目が開き少年は宿のベッドの上で起き上がった

「昔の夢か・・・」

右目に眼帯を付けた片腕の少年はつぶやく・・・

「ちっ、なんでいまさら・・・」

少年は昔の夢を見るたびに不機嫌になる

「ジン!!!」

小学生くらいの子どもが元気に部屋の戸をあけた

「ジン！目覚めはいかがかな？」

笑顔で子どもが問う

「ああ、とてもいいよポポ」

ジンも笑顔で答える

「ジンって旅をしてるんでしょ？なんで？」

「ちよつとね、いろいろやらなきゃいけないことがあって」

「ふーん、そうなんだ、じゃあ何で左腕がないの？」

しばらくの沈黙

愛想笑いでジンはごまかす

何かを察したポポが話題を変えた

「あ、ちよつと待ってて、今朝食持ってくるからさ」

「ありがとう、助かるよ」

ポポは大急ぎで走ってゆく

ふうつとジンは一息つく

彼は旅をしていてこの小さな町の宿に立ち寄った

ポポはこの町の宿屋の息子だ

どうやらジンになついたらしくジンもポポを気に入っていた

「朝食持ってきたよー！！」

ポポが朝食を手に部屋へ戻ってきた

「俺の母さんの料理は天下一品だぜい」

そこにはシンプルだがたしかに食欲をそそる手料理があった

「確かにとてもいいにおいだ、じゃあいただくとするよ」

焼き魚を一口食べる

「美味い！」

「だろだろ！！」

ポポはうれしそうに言う

「ところでポポの父さんはどうしたんだ？仕事か？」

一瞬、ポポの顔から笑顔が消えた・・・

「父さんは無死に殺された・・・」

しまった、と思った時にはもう遅かった

「すまんポポ・・・」

ジンはつぶやくように言った

「いいって、気にすんなよ」

ポポは悲しそうな笑顔で言った

「だから父さんの敵は俺が討つ！俺が無死殺しに、英雄になって・・・」

「やめろ！！！！」

いきなり怒鳴ったジんにポポは言葉を失う

「お前は無死殺しが何なのか分かっていない、お前じゃ、無理なんだ・・・」

ジンの表情は厳しかった

「なんでそんなこと言うんだよ・・・」

ジンは冷静さを取り戻す

「ポポ・・・俺は・・・」

「ジンのバカヤロー！！！！」

ポポは泣きながら外へ飛び出していった

「ポポ！！！！」

ジンがポポを呼び止めたその瞬間・・・

「無死だああ 無死が来たぞおお」

町に叫び声が響き渡った

「タイミングが悪すぎる！！」

（ポポが危ない！！！！）

ジンは宿を飛び出した

そこには何体かの町の人々の残骸があった

「くそっ！！！！」

ジンは走り出した

（ポポ、無事でいてくれ）

ジンはポポを探し、走り続ける・・・

続
く

ジン（後書き）

はじめましてタナトスです

初投稿になります

読んでいただいて

感謝感謝です！！！！

本当はバトルシーンまで行くつもりだったんですが

時間の都合上中途半端になってしまいました すみません

これからもがんばっていくつもりなので

アドバイスや感想などくれるとうれしいです！！！！

無死殺し（前書き）

無死殺し1 - 2話です

今回は描き終えた後1度ミスで文を全部消してしまっ
て大変でしたが
なんとかかけました

無死殺し

ジンはポポを探して走る

(ポポ、どこにいるんだ?)

羽織っているマントがなびく

「うあああああああああああああああ」

聞き覚えのある声にジンは反応する

「まさか俺は反対方向に来ていたのか！」

声が出たのは宿の方だった

「くそっ!!」

ジンは急いで引き返す

ポポの前に立っている無死

人のような姿だがその目は人形のように生気がまるでない

そして腕からは鎌のようなものが生えていて一目で人間ではないことが分かる

「お前はあの時父さんを殺した・・・」

ポポが言う

「ああん？確かに俺がこの町に来るのは2度目だが

殺した奴の顔なんざいちいち覚えてねえんだよ!!!」

無死はポポに向かって腕を振り下ろす

「ひっ!!」

ポポは頭を押さえる

しかし無死の攻撃はポポには届かなかった

「母さん!!!」

目を開くとポポをかばった母親が無死の鎌にやられていた

ポポの母親の肩から血が噴き出す

「母さん？母さん!!!」

ポポが呼びかけでも反応がなかった

「安心しろお前もすぐ母親のところへ連れてってやる」
笑顔で無死が腕を振りかざす

瞬間

無死のアゴに蹴りが入り無死の体が宙に舞った

「ジン!!!」

「遅くなった、ポポ・・・」

振り返った瞬間ジンから笑みが消える

「まさか・・・」

「父さんも母さんもあいつに殺された」

ポポは泣きだす

「いてえな！くそっ！！人間風情が無死に楯つくとは愚かな」

蹴り飛ばされた無死が起き上がった

「ポポ、下がってる」

ジンが言う

「ダメだよ！無死は無死殺しにしか倒せないんだよ！！死んじやうよ」

しかしジンは振り向かない

「俺の顔に蹴りかましやがって！！死刑確定だあ！！！！」

無死の雄たけびとともに無死の体が大きくなる

「いくぞお人間！！！！」

無死がものすごいスピードでジンに向かってゆく

「ジン逃げてええええええええ」

ポポの悲鳴にも似た叫び

ジンはマントを脱ぎすてる

その体には左腕が無く右腕には移植されたような跡があった

そしてジンは向かった来る無死に対して右腕を突き出した

ドーーーーーン

衝撃とともに無死の動きが止まる

「こんなものか？」

ジンはつぶやく

「貴様、無死殺しだったのか！？だが、これならどうだあ！！！」
無死は腕の鎌を大きく振る
それをジンが軽々とかわす

「ポポ！！」

ジンがポポを呼んだ

「お前は無死殺しが英雄だと言ったな、しかしそれは違う！！」
「え？」

「科学的に開発された対無死用兵器、イモータルキラ、それに適合できるものを探すために何百、いや

何千もの人が犠牲になった！適合できたとしても力に耐えきれず体の一部を失うこともある！俺の左腕のように！俺たち無死殺しは英雄なんかじゃない！実験動物にされ、戦いを宿命づけられた悲しい戦士なんだ！！！」

「そんなのって……」

ポポは言葉を失う

「ちっ！貴様、俺を本気にさせたこと後悔させてやるぜ！！」

イラついたように無死が言う

「覚悟はいいか無死殺し」

無死がもう一度突進の構えに入った

「ジン、もういちどくるよ！！」

ポポが言う

「はっ！さっきのと一緒にしたら死ぬぜ？」

自信に満ちた顔で無死が言う

「大丈夫だポポ」

そう言うとジンは右腕を高く上げた

「killer code 017 (キラークードゼロイチナナ) ジョーカー起動」

ジンの言葉とともに右腕が変化する

その形状、甲は鉄のようで獣のような爪が生えている

元の腕より一回り大きい

「すごい、あれなら・・・母さん、ジンが父さんと母さんの仇とつてくれるからね」

ポポは母親の亡骸にささやく

「死ねええ無死殺しいいいいい！！！！」

先ほどとは比べ物にならないスピードで無死がむかつてくる

「good night Forever（永久におやすみ）」

そうつぶやくと同時にジンは右腕で無死を切り裂いた

叫び声を上げる間もなく無死は消え去った

「ジョーカーで切り裂かれた無死は灰になり髪の毛一本もこの世には残らない・・・」

そうつぶやくジンの顔は悲しげだった

「母さん、ジンが仇を取ってくれたよ」

心なしかポポには母親が微笑んでいるように見えた

「ポポッ！！」

「何？」

突然呼ばれて驚いたようにポポは返事をする

「無死も元は人間なんだ・・・」

「えっ？」

ポポは驚きを隠せなかった

「神と呼ばれる者たちが人間を素材に作る兵器、それが無死だ・・・」

「そんなのって・・・」

「無死になれば人間の時の記憶を失い、自分は最初から無死だった
と思いきわ、そして人を襲う・・・」

「・・・」

ポポは言葉を失う

「だから俺たち無死殺しは神を倒してこの世にもう無死が生まれな
いようにする！！！！」

（もうポポの両親のような犠牲者を増やさないためにも）

「うん！きつと母さん達も喜ぶよ！」

ポポの母親の葬儀当日

「ポポ！」

「あつ、ジン、来てくれたんだ」

「ああ、ところでポポ・・・」

「何？」

「俺は今日この町を離れるだから・・・」

「だから？」

「俺と一緒に来ないか？」

それは両親を失い1人になったポポへのジンからの心遣いだった

「ジンあのね」

ポポは真剣なまなざしで言う

「せつかくの誘いだけど俺、この町に残るよ、

この町が好きだし、何より父さんと母さんがいた町だから！！」

「そっか」

ジンはほほ笑む

そして

「じゃあそろそろ俺は行くよ」

戸に手をかけてジンは言う

「ジン！！また来てね、いつでも歓迎するから！！」

「ああ、またいずれ」

笑顔で手を振りながらポポに別れを告げた

そしてジンの旅は再び始まった

ミドリの目をした少年はジンが町から出るのを見ていた
そして少年は微笑む
楽しげに・・・

続
く

無死殺し（後書き）

読んでいただいて感謝感謝です

今回はバトルシーンまで書きましたが

なんか敵が突進ばかり使うようになってしまいました

そこはネタとして読んでいただければと思います

では、次も頑張りたいと思います

神々プリンター〜(前書き)

無死殺し3話です

更新がだいぶ遅くなりました。

読んでいただけると嬉しいです。

神（プランター）

（あれから3日、いやそれ以上たつたか）

眼帯を付けた片腕の少年は森の中で思う。

少年の名前はジン。^{プランター}「神がこの世に造りだした悪魔「無死」^{ムシ}それをこの世から消し去れる唯一の兵器「イモータルキラー」を右腕に宿す者だ。

ジンは今わけあってやってきたこの森でかれこれ5日間も迷っている

「人間は水だけでしばらく生きていけるってのは本当らしいな。」

ジンは今にも倒れそうにふらふらしながら言う。

「しかしこの森の木の実は見ただけのことのないものばかりだな。」

ジンは数日前この森で空腹のあまり見るからに毒が入っていきそうな木の実を食べたところ、

案の定毒が入っていたらしく体がしびれて数時間動けなくなった。

「もうあんな思いはごめんだぜ。」

思い出しただけでジンは鳥肌が立った。

5日前・・・

ジンは旅の途中で立ち寄った村の男に言われた

「片腕のあんちゃん、悪いことは言わねえ。さっさとこの村から出ていきな。」

いきなり出ていけと言われたジンは言葉を失った。

そんなジンをよそに男は続ける。

「この村は西の森にいる鬼が頻繁にやってきて村人を食ってくんた。」

（鬼？まさか無死か？）

ジンは考え。そして問う。

「なぜ逃げない？」

男は言った。

「逃げれないのさ。鬼が村人全員の家族を1人ずつ人質に取っているからな。」

（そういうことか。しかし、無死ならすぐに殺す。わざわざ人質など・・・、）
少し考える。

（まあ、どっち道鬼の正体は無死だろう。よし、そうときまれば。）
「案内してくれ。」

「へっ？」

ジンの言葉に男は耳を疑う。

「だからその森に案内してくれ。俺がその鬼を始末する。」

ジンは微笑みながら言う。

「んなことできるわけねえだろ！！正気か？鬼だぞ鬼！！」
男はジンを怒鳴る。

「大丈夫だ。俺は無死殺し。そのみちのプロってところだ。」

ジンは右こぶしを握り締めながら言った。

男は少しイラついたような顔で言う。

「虫？害虫駆除なんかできてどうすんだよ。」

「・・・は？」

（まさかこの男無死を虫と勘違いして・・・。）

「はあ。」

ジンは深くため息をつく。

「分かったよ。素直にこの村を出ていく。」

そう言っつてジンは男に背を向け、村を出た。そして、

（確か森は西だったな。）

ジンは森へ向かった。

そして今に至る・・・

「くそっ、本当に鬼なんかいるのか？」

ぼそぼそとジンはつぶやく。その時

ガサッ！！！！

近くの草が揺れた。

ジンは身構えた。

（まさか、鬼か？）

にゃ〜ん

「あ？」

ジンの警戒がとかれた。

「猫？」

その猫はジンの足元にすり寄ってきた。と同時に、

（なんだこれは。何かおかしい。こいつは本当に猫なのか？）

ジンに疑問が生まれた。

（なぜこの猫には顔が無いんだ？）

そう思った瞬間にその猫はジンの足にしがみついた。そしてピピピと音を立て始めた。

「まさかつ！！！！！」

ドオーーーーーー

猫型の爆弾は爆発した。

あたりに爆発による煙が充満する。

「ごほつごほつ」

煙の中から対無死用兵器「killer code 017（キラークードゼロイチナナ）ジョーカー」を発動した

ジンが現れた。

「やはり爆弾だったか。」

（もう少しイモータルキラーの発動が遅れていたら、今頃は……）

考えるだけでぞっとする。

（今の爆弾は人間の技術では開発不可能だろう。となるとやはり。）
パチパチパチ

ジンの後ろから拍手が聞こえた。

「お見事。」

そこには小柄な少年が笑みを浮かべてたっていた。

「私の作った爆弾に対しての瞬時の対応、素晴らしい。」

少年は楽しみに言う。

「お前が鬼か？」

ジンは少年に問う。

「鬼？ああ違いますよ。あれは私の作品のひとつにすぎませんよ。」

少年は笑顔のままだ。

「お前、無死だな？」

ジンの問いに対して

「違います。」

少年は答える。

「残念だが俺は騙せんぞ。お前からは生気が感じられ・・・」

ジンが言いかけた瞬間。

「私は神ブランターです。」

「!？」

少年の言葉にジンは言葉を失う。

うつすらと開いた少年の目はミドリに輝いていた。

神々プリンター（後書き）

まずは読んでいただいて感謝感謝です。

これからもがんばるつもりなので

感想やアドバスなどいただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9084y/>

無死殺し

2011年12月9日02時07分発行